

松前町アーバンスポーツ施設整備検討会報告書（第1回～第7回）

2026. 6. 11

松前町アーバンスポーツ施設整備検討会

はじめに

本報告書は、松前町におけるアーバンスポーツ施設の整備に向け、2025年11月から計7回にわたり開催された検討会における議論を集約したものです。本検討会では、多世代が交流し新たな文化が生まれる空間のあり方について、専門的かつ多角的な視点から活発な議論が行われました。本報告書を、今後の『松前町アーバンスポーツ施設整備基本構想』策定における指針として御活用ください。

検討会メンバー

<会長>

松前町長 田中 浩介

<委員>

株式会社中国四国博報堂 イベントプロデューサー 青木 唯

松山市アクティブ・スポーツ協会 会長 池田 裕之

松前町アーバンスポーツパーク設立の会 会長 松室 純平

愛媛県スケートボード協会 会長 宮内 拓也

株式会社アウトナンバー SOME CITY EHIME オーガナイザー 田中 康佑

<オブザーバー>

株式会社サードフロア 松波 雄大

<アドバイザー>

株式会社アウトナンバー 代表取締役社長 小野田 博彦

これまでのスケジュール

<第1回（2025. 11. 26）>

- 今後の想定スケジュール
- 県内近隣の施設情報共有・議論

<第2回 (2025. 12. 25) >

- 全国・世界の施設調査共有・議論

<第3回 (2026. 1. 20) >

- ゾーニングについて
- 施設整備に向けた議論

<第4回 (2026. 2. 3) >

- 菊陽町とのオンライン会議

<第5回 (2026. 2. 4) > ※一般・マスコミ公開

- コンセプト議論
(前回オンライン意見交換のフィードバックも実施)

<第6回 (2026. 2. 26) >

- BMX・スケートボードユーザー向け情報収集協議

<第7回 (2026. 3. 24) >

- 構想案策定に向けて議論・整理

I. 施設の基本理念とコンセプト

< 1. 施設の本質的な役割 >

- 本施設は単なる競技施設ではなく、上級者が挑戦したくなる本格的な仕様と、地域の子どもたちが日常的に使用したくなる空間という、両方の役割を持つ施設として成立させることが重要。
- 競技者（プレーヤー）以外の人にも自然に集まり、施設の利用・滞在したくなる空間価値を成立させる。

< 2. 「OPEN & CREATIVE PARK」の定義 >

議論を進める中で、施設コンセプトとして「OPEN & CREATIVE PARK」が提唱された。

【OPEN】

年齢や目的（競技・観覧・通行等）を問わず、誰もが自由に利用できる遮断しない空間設計を目指す。

- オープンで誰もが利用できる自由な空間の確保
- 競技者のみならず、観覧者・通行人など年齢問わず多様な人々が自然に集う
- 遮断しない空間設計

【CREATIVE】

あえて用途を限定しない『空間の可変性（余白）』を持たせることで、利用者の主体的な創造性を引き出すことや、新たな遊びや独自コミュニティが自発的に生まれる文化の醸成を促す。

- アート・デザインで利用者の想像力や創造性を引き出す仕掛け
- 子どもが想像力を活かし、その場を活用した遊びを独自に行う事ができる空間
- 異なる文化（ストリートカルチャー）が交差することで、新しいものが自発的に生まれる環境

< 3. 「非現実的な空間」の創出 >

- 目で見てびっくりするような、印象が強く残るもの
- かっこいいもの、松前にないもの
- 他の地域から、足を運びたくなる空間デザイン
- 競技性と日常利用のバランスを両立させる

II. 空間設計の基本方針

< 1. 遮断しない空間構成 >

検討会では、従来の公園のようにフェンスや壁で機能を細かく分けすぎないことが、文化（ストリートカルチャー）の醸成や多様な交流を生むために不可欠であると強調されました。

【具体的な設計方針】

競技エリア、休憩スペース、飲食エリアなど、複数のエリアを設けること。
各エリアの間で、視線と動線が自然に繋がるような一体的な空間設計が重要。
特定の競技エリアだけでなく、健康や住民活動に資する要素を盛り込むこと。

- 各エリア（プレイ・休憩・飲食・共有スペース）を切り離さず、視線と動線が自然に溶け込む空間設計
- 異なる目的を持つ人々が、同じ景色の中で自然に共存できる一体的な構成
共有できる一体的な構成
- 想定外の使われ方や、そこから生まれる偶発的な交流をあらかじめ前提とした配置

【ゾーニングの考え方】

異なる目的を持つ利用者が同じ景色の中に自然に共存し、想定外の使われ方や多様な人々との偶発的な交流が生まれる「余白」を前提としたゾーニング（配置計画）を検討。

- 各ゾーンは機能上の区分を示すものであり、視線・動線・空間の連続性が重要

< 2. 多世代・多目的の受け皿 >

競技者（プレーヤー）向けの設備だけでなく、住民やその他エリアからの来訪者が楽しめる設備を要すること。また、どの年代の利用者でも楽しめる設備や取り組みを要すること。

- 競技者（プレーヤー）だけでなく、来訪者が楽しめる設備を構える
- 多様な年齢、世代の利用者が来訪しても利用できる
- イベントや事業を通じて、多様な競技に触れることができる

< 3. 観るスポーツとしての設計 >

アーバンスポーツの「見る楽しさ」を最大限に引き出し、観る環境を整備し、再訪を促す仕掛けを考える。

- 日差しを防ぐ観覧スペースの検討
- 観覧文化が自然に生まれる空間構成

< 4. 規制ではなく、構造で安全を担保 >

過度なルールや禁止事項で利用を制限するのではなく、設計上の工夫と利用者同士のコミュニケーションによって持続可能な安全性を目指す。

【構造によるリスク軽減】

利用者それぞれのレベル差（初心者から上級者）に対して分断することなく衝突などの重大なリスクを未然に防ぐ考えを持った構造設計を実施。

【視覚的なガイダンス】

注意点や動線が直感的、視覚的に伝わるデザインを取り入れ、利用者が自ら安全な選択を行えるように促す。

【譲り合いと見守りの文化】

利用者同士が周囲に配慮し、挑戦する人を支え合う文化の醸成、またキッズ利用については保護者を含めた自然な見守りが機能するような配置を検討。

Ⅲ. 施設要件について

本章における具体的な施設要件は、現時点ではテーマや方向性を整理する段階であるため、詳細な設計については、今後の基本構想策定以降の整備計画段階において専門家と協議の上、決定するものとします。

< 1. 共通事項 >

各競技エリアに共通する、施設全体の価値を高めるための基本的な考え方と設備要件

【基本的な考え方】

- 具体的なゾーニングは設計段階で専門家と相談が必要
- 観客用のスペース（ひな壇など）が必要
- 音響設備、照明設備の導入も検討

【設計プロセスの可視化】

それぞれの競技スペースの施工プロセスを可視化、または参加ができるような仕掛けをつくることで、場所に対する関わりや愛着を促す。

【クリエイティブの重要性】

松前町独自の「OPEN & CREATIVE PARK」を体現するアート性、デザイン性を表現する。

< 2. スケートボード・BMX >

【基本的な考え方】

- スケートボードとBMXの共存
- 競技性と日常性のバランスに取り組む
- ハード面だけでなくソフト面の考慮も必要

【施設要件】

- スケートボード・BMXが混在利用できる設計が必要
- 日本の多くのパークにみられるサイズではなく、流れ（ライン）によって滑走距離の長い構成を目指す
- レベルに応じたセクションのバリエーションをつくる
初心者用： 未経験者や子どもが挑戦しやすいよう、低めのレールやレッジ（縁石）を配置
中・上級者用： 約60cm前後を基準としたボックスやレール、バリエーション豊かなセクションを配置

< 3. ストリートバスケット >

【基本的な考え方】

- 競技性よりも自由性が重要
- 既存施設とは差別化された空間を目指す
- 競技利用や大会実施も可能な空間として設計

【施設要件】

- 無料開放をベースとした利用（一般的体育館利用との棲み分け）
- シューティング練習用ゴールの設置

IV. 利用者層と運営方針

< 1. 多様な利用者層の想定 >

本施設は、アーバンスポーツの競技者（プレーヤー）だけが利用する空間ではなく、日常的に多様な町民が行き交い、共存する「多世代交流型パーク」として利用者層を想定します。

【想定される利用者】

- 競技者（初心者～上級者まで全般）
- 観覧者
- 通行人
- 地域住民
- 子どもを連れた親
- 高齢者（ウォーキング等）

< 2. 無料・有料の考え方 >

【無料の考え方】

- ストリートバスケットはイベント時に占有料を取るのが良いが、基本的に無料を推奨
- スケートボード・BMXは有料と無料のゾーニングを検討
- 「無料であれば利用者が来る、増える」という前提は必ずしも成り立たない

【有料の考え方】

- 有料とする目的は収益だけではなく、関係性と安心感をつくる
- 専門的知見をもった管理者が居ることで、初心者が利用しやすい環境が生まれる
- ルールと責任の所在を明確にすることで、継続的な利用と育成につながる

< 3. その他 >

【初心者への対応】

- 初心者の入口は、体験会・スクール・イベント・紹介など目的を持った機会が適している
- 未経験者が挑戦するには、料金だけでなく、体験する理由やきっかけが必要
- 初心者のスペースに経験者が混ざることによって居づらくなる可能性がある

【民営について】

- 民営の場合は収益を考えて有料・無料を考える必要がある
- 継続していくために、自立した運営組織が必要である
- パートナー企業や支援企業との取り組みも検討すべき

V. イベント・コンテンツ戦略

本施設を単なる「ハコモノ」にせず、常に活気ある文化空間として維持していくためには、施設に「動き」をもたらす定期的・継続的なイベント・コンテンツ戦略が不可欠です。

< 1. 定期的なイベント開催 >

- 定期的なイベントが起きている状態が好ましい
- 企業・団体の専有利用時は有料化して収益源にする

< 2. 利用者による企画実現 >

- 利用者が自らイベントを企画・実現できる仕組み
- 地域の子どもたちがこの場所に関わる企画

< 3. 将来的な機能拡張 >

- 将来的に機能拡大など必要に応じて対応できると良い

VI. その他事例や経験からの学び

- 玄人向けの施設は、玄人が多い地域には好かれるが、松前の状況やコンセプトとは異なると思われる。
- 若者には、音楽とスポーツが交差した取り組みはかっこよく見える。
- 競技施設の集合体ではなく、異なる文化（ストリートカルチャー）が同じ時間・同じ場所を共有することで「文化が育つ場」となるのではないか。
- 他の競技の選手の動きを見て学ぶ時間が、選手の成長につながっていくのではないか。
- 柵などで競技エリアを完全に分けた環境では偶然の交差が起きにくい。

【菊陽町との意見交換による気付き】

菊陽町のコンセプトはスケートボード中心で国際大会実施を目指している。松前の目指すテーマとは相違があるが、トップレベルの大会を重視する施設をコンセプトとする場合は魅力的な施設である。

なお、他のパークの意見もオンラインで聞きたいので松前のコンセプトに合った場所を探してみるが事例が少ない。

おわりに

本報告書は、計7回にわたる、「松前町アーバンスポーツ施設整備検討会」において、委員それぞれの専門的な知見によって積み上げられた議論のまとめです。私たちが目指すのは、単なる「ハコモノ」の整備ではなく、この場所に集う人々が挑戦し、つながることで新たな活気が生まれ続ける空間の実現です。本報告書で整理された内容が反映された施設が松前町の多世代の町民に愛され、町外からも人が訪れる新たなランドマークとなるよう、今後の事業推進を期待し、本検討会の報告といたします。